

## 小さい村だからこそ日本全体の課題を解決するための先進モデルになり得る

西粟倉村は岡山県の北東端に位置し、人口わずか1500人ほどの小さな村である。しかし、明治22（1889）年の町村制施行とともに誕生して以来、昭和や平成の大合併時にも自立を貫き通し、今では全国から注目を浴びる存在となっている。それは、中国山地に抱かれた豊かな森林資源を生かし、起業や移住の促進につなげているからだ。平成25年度には内閣府から環境モデル都市に、翌26年度には農林水産省からバイオマス産業都市に選定。「百年の森林（もり）構想」に基づいて、林業の活性化や自然エネルギーの普及などに取り組んでいる。



岡山県西粟倉村長  
**青木 秀樹**  
(あおき・ひでき)

昭和29年12月14日、西粟倉村生まれ、63歳。昭和52年3月、龍谷大学卒業。同年4月、大阪市内の民間会社に就職。昭和56年7月に西粟倉村へ帰り、家業の食品会社に従事する。平成7年4月村議会初当選、以来連続5期当選。5期目の平成23年6月末日に職を辞し、村長選に出馬。同年9月4日初当選、現在2期目を務める。村議会在任中は、総務常任委員長1期、議長2期と要職を務める。

### 国に依存してばかりでは自治体と言えない

——まず、政治家を志した理由をお教えてください。

〈青木〉 私はこの小さな村で生まれ、その後村外に出て学校を卒業し、就職もしました。しかし長男ですから、都市部で暮らしながらもいつかは帰る宿命にあるという自覚はずっと持っていました。

私が大学を卒業したのは昭和52年ですから、高度経済成長が落ち着いて日本人が豊かになっていた時代です。人口もどんどん増えて、その多くが都市部に集まってきました。そういう状況の中、都会でサラリーマン生活を送っていると、「都市と田舎」ということについて考えさせられました。都市生活では、周りにたくさんの人がいるのに、誰も知っている人がいない。こういう社会の中に未来はあるのだろうかという思いが少しずつ大きくなり、こちらに戻ってきました。

商家の生まれなので、帰郷してその商売を継いでいましたが、その頃は都市と田舎の格差がどんどん広がっていました。でもこの村がある限り、何らかの存在意義はあるはずだし、それを形にしたいと考えるようになり、40代になった頃に村議会議員

選挙に出たのです。議員になると、国、県、市町村それぞれの成り立ちや仕組みも見えてきました。そこで感じたのは、次のようなことです。

国は国民生活を守り円滑に行政を運営していくための仕組みができていて、ガバナンスがきちんと効いています。財政的には、過疎地域の市町村がはじめから自立できないことを前提に、基本的には国がお金を集めて地方に配分する仕組みをとっています。非常によくできているけれども、これをずっと続けていると、何もしなくても国がうまく配分してくれるわけだから、国に依存する体質ができてしまいます。

日本を人間の体にたとえるなら、さまざまな器官がそれぞれの機能を持ちながら、全体として1人の体をつくっているわけです。どんなに小さな器官であれ、1つでも欠けてしまったら人間は生きていけません。また、小さな1つの器官が果たす役割によって、その人間の働きも違ってきます。

### 合併して大きくなった自治体は地域の個性が失われてしまう

——平成の大合併は、その意味では人体のつくり

そのものを変えるような出来事でしたね。

〈青木〉 私は議員として、合併反対・自立の旗振り役を務めました。周辺の市町村は次々に合併しましたが、先ほどから言っているように、西粟倉村として果たすべき役割があるはずだと考えたからです。また、さまざまな個性を持つ地域が1つの自治体として大きくまとまると、その個性が失われてしまうとも思いました。もちろん住民にもアンケートなどをして意向を聞き、合意形成を図ったうえで合併しない道を選びました。

もちろん、財政的に自立できているから合併しないのかと問われたら、そうではありません。しかし合併したら財政がよくなるかと言えば、そんなこともありません。だったら、西粟倉らしさとは何かをみんなでもっと考え、この地域でしかできないことをやっつけていこうというわけです。

——その西粟倉らしさというのが、森林を生かした取り組みですね。

〈青木〉 はい。村の面積の95%は山林で、その85%は戦後になって植林した人工林です。60~70年生の伐期を迎えたスギやヒノキがたくさん生えています。ただ現在は、ご存じのように国産材の価格が長期にわたって低迷を続け、生業としての林業がなかなか成り立たない状況にあります。林業の盛んな時代であれば30年くらいから伐期を迎えるのに、今は出口がないので60年、70年たっても伐られないまま山に存在しています。

村有林と民有林がありますが、村有林については国の事業を使ってこれまで何らかの手入れをしてきました。深刻なのは民有林です。みなさんが個人で所有されている山については、財源的な裏付けがないので手入れもままならない現状にあります。今後も放置し続けると環境にも悪影響が出るし、村の財産である山がそういう状況で我々が生き延びていけるのかと聞いたら、それはあり得ないと思います。山林以外の残り5%のところでもいくらか活性化を図ったとしても、それは村の持続性にはつながりにくいのです。

## 民有林に機械を入れるため 林道の整備に税金を投入

——山林は西粟倉村の象徴的な存在なのですね。

〈青木〉 決して経済的な動機ではなく、どちらかというと観念論的に、「何十年か後にこの村が続いているとしたら、山はこんな状態ではないはず」という思いがあります。きちんと整備され、見た目も美しく、山としての多面的な機能を十分に果たせるような姿になっていないと、我々の子孫がここで住み続けることはできません。

——そうした思いから生まれたのが、「百年の森林構想」ですね。

〈青木〉 「百年の森林構想」は、前任の村長時代の平成20年に策定されたもので、私は議長として策定に関わり、3年後に村長として引き継ぐことになりました。50年前に子や孫のため木を植えた人たちの思いを受け止め、立派な百年の森に育てて50年後の子孫に引き継いでいこうという趣旨です。

先ほども言ったように、問題は手入れされていない民有林なので、そこへの支援が構想の核となっています。具体的には、山林の所有者と村とが「森林長期施業管理協定」を結び、10年単位で契約を更新しながら村が森林整備を行う仕組みです。

幸いなことにこの村は、国土調査がかなり進んでいます。そのため、この山の持主が誰だかわからないとか、誰の山と誰の山の境界が不明だといった問題がなく、手をつけやすい環境が整っていました。

手入れの方法としては、まず機械が入るための林道の整備をしなければなりません。林業の構造不況は今も続いています。木材の需要はあるのに、その6~7割を輸入材で賄っているという状況は今も変わっていません。昭和30年代であれば、1立方メートルのヒノキが12~13万円したのが、今はその10分の1です。単純化していうと、50年前は12~13人分の人件費を賄えた木材の価値が、今は1人分にしかならないということです。そんな中で林業を成り立たせるには、機械化が不可欠ですが、機械を入れるためには道をつけないといけません。そうはいっても、今の市況では個人で林道を整備するような経済的余裕はありません。これまではそこがネックとなって、山が放置されてきました。

そこで、村の財源を使って民有林の林道整備を行ったのです。なぜそんなことができたかという点、面積の大きい小さいはあってもほとんどの家が山持ちだからです。したがって、民有林に対して税金を投入しても公平性に欠くことがなく、村民の合意



西粟倉村の中心部

が得られやすいという事情がありました。

## 間伐で伐り出した節のある無垢材は 本物の木の味わいとして高い需要

——林道を整備した山で、どのような作業を進めていったのでしょうか。

〈青木〉 そうやって道を整備した山で、まず間伐を行いました。劣勢間伐といって成長の劣っている木を優先して伐っていくので、従来のように市場を通した流通でその間伐材を売っても、とてもコストに見合いません。そこで、都会の若い人たちの知恵を借りて、間伐材の活用方法を考えました。

その結果、村内の企業が間伐材で木工作品を製作して販売したり、合板に加工して需要先に直接販売するといった取組みが始まりました。すると、市場を通さない分流通コストが軽減でき、いくらかでも利益を上げることができます。その利益は村と所有者さんで折半する、そんな仕組みにしました。

また、間伐材をそのまま切り出した無垢材についても、従来の市場を通さず、製材して都市部の住宅メーカーに直接販売するルートを開拓しました。合板や集成材に溢れた都市部の住宅では、本物の木をそのまま使った無垢材は非常に稀です。また、従来の日本家屋では、壁や床といった内装材には節のない無垢材を使うのが当たり前で、節があるものは倉庫の壁、床などに使われていました。

しかし近年は、節も本物の木ならではの味わいの1つとして受け入れられるようになりました。しかも、節なしに比べぐんと安く供給できるという利点があります。価値がある節ありの木材を、これまでの林業関係者は価値がない、需要がないと決めつけてしまっていて、それが林業不況にもつながっていたのだと思います。



ローカルベンチャー（村楽エナジー&元湯）

これは日本全体の問題です。木材価格が安いとか高いとかいう以前に、木を出そうにも道がない。森林施業のための道さえつければ、間伐材を伐り出してそれに新しい価値をつけ、利益を生み出していくことも可能です。

## 動き出すことで課題解決の ヒントもどんどん生まれる

——西粟倉村の事例は、他の地域にとっても参考になるということですね。

〈青木〉 そうです。こうした取組みを進めていくうちに、西粟倉村ならではの役割は何かという、ずっと考え続けてきたことへの答えが見えてきたような気がします。現在の日本には、各地域に共通するさまざまな課題があります。その解決策を指し示すのは、必ずしも大都市ではありません。むしろ我々のような小回りの利く自治体だからこそ、コンパクトな規模なので問題が見えやすいし、その対策のために動きやすいということがあります。そして、動き始めてみて気づくこともたくさんあります。

もちろん我々も、最初から日本全体の問題を解決しようと思ったわけではありません。自分の地域の小さな問題に対処するため、とりあえず動き始めました。すると、動いていくうちに次から次へヒントが見えてきたのです。間伐で伐り出した節のある無垢材が、都市部の住宅では需要がないどころか供給が不足しているということも、動き出してわかったことの1つです。

西粟倉の場合は村の一般財源を民有林の整備に充てました。国全体としてもこのような取組みが必要であり、そのためには財源の手当てが不可欠ということで、今度森林環境税が創設されることになったと言えます。





西栗倉村の森林風景



百年の森林事業（作業道の開設）

## 若者が立ち上げた木材加工会社が 30人以上を雇用する企業に成長

——年間予算16億円ほどの村で、民有林整備に財源を投入するというのは相当思い切った決断だったと思います。

〈青木〉 逆に言えば小さな村だからこそ、あれもこれもではなく、最も喫緊の課題は何かを村全体で共有して、そこに経営資源を集中しないといけないということがあります。それと、やはり合併しないという決断をしたことが大きかったでしょうね。自立の道を選択したことで、誰かが何かしてくれるのを待ってればいいという状況ではなくなったわけです。

財源については、5ヘクタール以上の山林を集約化して団地を形成し、計画を作成して施業していく取組みに対して、国からいくらかの補助が出る制度ができたので、これも活用しています。

——村に木材の加工会社もできたというお話ですが、雇用の受け皿としても貴重ですね。

〈青木〉 西栗倉森の学校という名前で、最初は4～5人の若者で始めたのが、今は27人の会社に成長しています。製材機も買ったりして設備も充実しつつあります。当初は売上高も数百万円程度だったと思いますが、今では3億円以上にまで増えました。

都市部の人からすると、ハウスメーカーが供給する木の家は良質だけれど高いというイメージがあります。しかし我々からすると、木はたくさんあるのに安すぎて伐り出せない。このギャップはどこから来るかという、複雑な流通経路のため両者の間で顔の見える関係ができていないからです。安い間伐材も品質的には全然劣っていないということをきちんと理解してもらうことで、斜陽産業と思われていた製材会社を軌道に乗せることができました。最

近はフローリング材として50センチ角に揃えたユカハリタイルという格安のキットを開発するなど、若い人ならではのアイデアで市場や販路を広げています。

## 村の温泉施設に薪ボイラーを 導入し木質バイオマスを活用

——再生可能エネルギーの取組みも、森林再生の動きからつながっているのでしょうか。

〈青木〉 そうですね。森林はもともと木を育てて伐るだけの場所ではありません。生態系の宝庫であり、さまざまな山の恵みをもたらしてくれる場であり、水の源でもあり、治水機能もあります。ただ、戦後の拡大造林で村の山林の82%を人工林にしたことで、その生態系を少なからず傷つけたり、森林の機能を弱めてしまったことは否定できません。本来の多面的な機能を取り戻していくことも、百年の森林構想が目指すべき目的の1つです。

そのためにどうするかということですが、森林の施業が進んで間伐材の活用が進められる中で、労賃に見合わないものは山に放置されており、課題となっていました。こうした林地残材をバイオマス燃料として活用することで、私たちが目指す持続可能な村づくりにとって重要な要素の1つであるエネルギーの自給につなげられるのではないかと——そう考えたのです。

西栗倉村には温泉施設が3つあり、その熱源を石油ボイラーから薪ボイラーに切り替えて、間伐未利用材を木質バイオマス燃料として利用しています。現在新しい役場庁舎を建設中ですが、その熱供給システムもすべてバイオマスを活用します。このシステムを継続的に運用していく限り、薪やチップをつくるという仕事が永続的に必要です。地方創生



伐り出された間伐材



温泉施設に導入された薪ボイラー

の鍵は地域での雇用創出ですが、それは持続可能な地域を維持していくための仕事をつくることなのだと思います。

都市部ではどうしても経済合理性が優先されますが、所得が大きければ大きいほど幸せになれるとは限りません。地域の持続可能性を担保するという観点から仕事を考えると、それほど大きな所得にはならなくとも、まだまだたくさんの仕事を生み出すことができるのではないのでしょうか。そしてそういう仕事こそ、生きがいや幸せを感じられるのではないかと思います。また今後は、これまで海外の資源を国内に導入して生産していた企業も、中山間地の資源に目を向けて、持っている知見や技術をその活用のために使っていくようになってほしいですね。そういう流れが作れば、日本の社会は新たなフェーズに入っていくように思うし、この点も含めて西栗倉村がモデルになれたらと考えているところです。

### 小水力発電や太陽光発電など 総合的に再生可能エネルギーを推進

——木質バイオマスだけでなく、さまざまな再生可能エネルギーをトータルに促進しているのも特徴ですね。

〈青木〉 昭和41年から稼動していた280kwの小水力発電所の老朽化に伴う大規模改修工事を4年ほど前に完了しました。改修によって出力は290kwとなり、平成26年には再生可能エネルギー発電設備の認定を受けています。また、村民参加型太陽光発電所の建設にも取り組み、48.64kwの「にしあわくらおひさま発電所」が平成26年3月に発電を開始しました。

こうした再生可能エネルギーの促進と同時に、省

エネルギーを進めることで、低炭素な村づくりを推進しています。たとえば、小水力発電所によって得られた収益の一部を活用し、家庭での住宅用太陽光発電施設やエコキュートなどの導入を促しています。

西栗倉のような中山間地は、水の源を持っており、食料も供給しています。あとはエネルギーです。戦後、都市も地方も化石エネルギーに頼る生活になってしまいましたが、地方には本来、バイオマス、水、太陽などエネルギーを自給できるだけの資源が豊富にあるのです。自分の地域で生み出したエネルギーで暮らす仕組みがここで確立すれば、これもまた日本全体に波及していくかも知れません。

文字通り「環境モデル都市」として、さまざまな面で今後の日本のあり方にとってヒントとなるようなモデルを作り出していくことが、私の使命だと考えています。繰り返しになりますが、先進的なモデルを示す取組みは、コンパクトな自治体だからこそ実行しやすいし、成功するにせよ失敗するにせよ結果も早く出るので検証しやすいのです。

### ローカルベンチャースクールにより 西栗倉での起業を継続支援

——環境モデル都市として全国的に知名度が高まっていることもあり、近年は移住者も増えているようですね。

〈青木〉 森林再生の取組みを進める過程で、総務省の地域おこし協力隊の制度も活用しました。彼らはみな、地域のためにさまざまな形で貢献したいという真摯な思いを持っていますが、ただ地域とのマッチングがうまくいかなければ、せっかくの思いが生かせないケースも出てきます。したがって、赴任する前に1年ほど準備期間を設けて、地域のこと





村民参加型の太陽光発電所



ローカルベンチャーの先駆けとなった(株)西粟倉森の学校

を理解したり、自分のやりたいことを実現できる可能性を探ったりすることが必要だと考えました。

そんな発想から誕生したのが、西粟倉ローカルベンチャースクール（LVS）で、文字通り、西粟倉を拠点にして起業しようという人を支援するプログラムです。事業プランを募集して、応募者に対し約5か月間にわたって合宿やフィールドワークも交えながら、地域や行政も一緒になってプランのブラッシュアップを図ります。そのうえで選考を行い、通過者に対して地域おこし協力隊の制度などを適用して財政支援をしたり、職員や民間のコーディネーターがフォローを継続します。

LVSの立ち上げ以前からの例も含め、西粟倉村ではこれまでに30社以上が起業しています。最初は林業の関係で、幼稚園で使う遊具を間伐材で作ることから始めて、今は幼稚園の運営まで手掛けようとしています。ほかにも、帽子を手作りしたり、いろんなものから油を搾ったり、山陰地方を中心においしい日本酒を集めて販売したりしています。また、設計・建設、ITなどの企業もでき、これまで外に出ていた公共事業を自前でできるようになりました。次々にベンチャービジネスが生まれることで、村にないものは作ればいい、あるものも変えればいいという能動的な動きが地域全体で高まっているように感じます。

平成28年には、西粟倉村が呼びかけてローカルベンチャー推進協議会を立ち上げ、現在は全国の11自治体が参画しています。

**自分が苦勞したことが国の政策として返ってくれば職員の大きな励みに**

——職員にはどのような能力が求められますか。

〈青木〉 西粟倉村は日本の抱えるさまざまな課題

を解決するためのモデルになるべきというのが私の考えです。各所管課にも、それぞれの分野で国レベルの課題、制度上の問題点があるはずで、それをどう解決したらいいかを常に考え、チャレンジしてほしいと言っています。

失敗してもいいのです。ただし、できるだけ早いうちに気づいてロスを最小限にとどめ、次の大きな成功に導いていけばいい。大切なのはスピードと、正面から課題に向き合う姿勢です。ルーティンワークをこなすことももちろん重要ですが、そのうえで何かトラブルがあったとき、その背景にある問題を追求し、何をどう変えればトラブルがなくなるのかを考えてやり方を工夫してほしいと思います。

制度上は県と市町村は対等ですが、予算規模からいっても県の方が圧倒的に大きいし、県を通じて補助金が下りてくことも多いので、職員はつい県の方を見て仕事をしがちです。しかし、県は中間管理的な業務が中心ですから、どうしても当事者意識を持ちにくい。生活の現場と直結しているのが市町村の強みであり、職員も現場から課題とその解決策を考えることが求められます。

それと、モデル性を重視するのは職員のやりがいにつながるからでもあります。自分が苦勞したことが国の政策となって返ってくることは、彼らにとって非常に励みになります。また、政策をつくり上げる過程で各省庁のエキスパートと意見交換することは、職員にとって貴重な能力向上の機会です。それに加えて、国との人脈ができることで、この問題については誰に相談すればいいというのがわかり、動きがより早くなります。

トップとしては、職員が失敗を恐れずにチャレンジし、自分の仕事に自信とやりがいを持てるような環境を整えるのが仕事だと考えています。

——今日はありがとうございました。